

清平調詞 その一 (李白)

雲には 衣裳を 想い 花には 容を 思う

春風 檻を 払うて 露華 濃かなり

若し 群玉 山頭に 見るに 非ずんば

会ず 瑤台 月下に 向つて 逢わん

雲想衣裳花想容 春風拂檻露華濃  
若非郡玉山頭見 會向瑤臺月下逢

解説 玄宗皇帝が楊貴妃とともに、沈香亭で牡丹の花を愛でて遊宴したとき、李白に命じて詠じさせたもの。

語釈 ※容Ⅱ容貌。※檻Ⅱ宮殿の手すり。※露華Ⅱ美しい露。  
※濃Ⅱあでやかで美しいこと。※群玉山Ⅱ玉山ともいう。  
西王母の住む山。※会Ⅱきつとくだろう。※瑤台Ⅱ仙人のいるところ。

通釈 雲を見れば楊貴妃の美しい衣裳が目につかび、牡丹の花を見れば貴妃の美貌が連想される。春風は沈香亭の手すりを吹きぬけ、牡丹をぬらす美しい露はあでやかだ。これほどの美人は、群玉山のあたりで見かけるのでなければ、瑤台の月あかりのもとはしかめぐりあえないだろう。